

# 冒険キャンプに参加したサッカージュニア選手の 自己主張性と他者傾聴に関する研究

三橋 拓也 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード：冒険キャンプ，サッカージュニア選手，自己主張性，傾聴

## 1. 緒言

筆者のこれまでのサッカー経験・指導経験から、個人またはチームに必要とされるのは自己主張と他人の意見を聞くことが重要であると筆者は考える。布目ら<sup>1)</sup>(1993)の研究において、キャンプ後に幼児の自己主張性が向上し、キャンプでの自己主張性について効果があると認められた。このような自己主張性や他者傾聴の成長を促すことが期待できる場として、キャンプ活動がある。

そこで本研究は、キャンプ体験がサッカージュニア選手の自己主張性と他者傾聴に関する研究について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

【研究対象】2014年8月18日～20日の2泊3日のキャンプに参加した兵庫県内の某Iサッカークラブに通う小学校高学年(4～6年)15名。【研究方法】「自己主張性」を測定するために、楠本ら<sup>2)</sup>が作成した「自己制御尺度項目(児童用)」のうち5項目を用いた。また、他者傾聴については筆者が独自に作成した3項目を用いた合計8項目の質問紙を作成し、これらをキャンプ前(以下pre)、キャンプ後(以下post1)、1か月後(以下post2)の計3回実施した。

## 3. 結果・考察

「自己主張性」と「他者傾聴」の合計得点をpre, post1, post2の3条件で調査時期を要因とする1要因の分散分析(反復測定)を行った結果、以下の表の通りになった。

表1：自己主張と他者傾聴の平均・標準偏差・分散分析結果

要因	pre	post1	post2	F値
自己主張	16.93(3.71)	16.26(3.53)	16.60(3.94)	1.76 n.s.
傾聴	11.80(2.07)	11.26(2.40)	9.73(2.98)	4.11 n.s.

n=15

この結果からキャンプは参加者の自己主張得点と他者傾聴得点に有意な変容を与えなかったことが明らかになった。その要因として、キャンププログラムの内容が考えられる。キャンプの中で、仲間と協力したり自らの意見や発言を行う場面が十分でなかったことから、自己主張性と他者傾聴の得点に有意な変化がみられなかったと考えられる。

全体では有意な変化が見られなかったため、

アンケートの各項目の変容を見るために pre, post1, post2 の3回の調査時期を要因とする1要因の分散分析を行った。その結果、8項目のうち、項目2「ひどい文句をいわれたりからかわれたりしたとき怒りますか？」に1%水準で有意な差が見られた(調査時期： $f(1,39)=6,391, p<.01$ )。また調査時期において有意な差が見られたため、多重比較を行った。その結果、preとpost1において5%水準で有意な差が見られた。向上した要因として、キャンプ活動での様々なプログラムの中で、それぞれの考えが一致したときに、文句や人を軽蔑するような発言をしたときに、注意をしたり、否定できていたことが向上に影響を与えた要因の1つであると考えられる。

次に、自己主張得点がpreからpost1にかけて向上したキャンプ参加者6名の個々について、アンケート調査、記述調査の回答を得たデータの結果をまとめた。同様に他者傾聴に関しても4名について行った。この結果から、グループ活動での会話や話し合いなどのきっかけにより自己主張する、相手の話を聴くことが向上の理由として考えられる。

## 4. 結論

キャンプを体験することで、自己主張性または他者傾聴は有意な変化が見られなかった。サッカージュニア選手の自己主張性と他者傾聴の向上には、キャンプのプログラムにおいて自分の意見や発言する場や、友達の意見を聴く活動を十分に組み込み、行うことが必要であると考えられる。また、チームづくりにおいてキャンプ体験や非日常的活動を行うことで、新たな一面を発見することができ、よりよい集団づくり(チームづくり)のきっかけができると考えられる。また、サッカーにおいてミーティングの場でも互いに議論し合えるようなコミュニケーションを行うことで、練習や試合においても自己主張や他者傾聴の向上が期待でき、チーム力の向上に役立つのではないかと考える。

## 引用文献

- 布目靖則、飯田稔、宍戸和行、多田聡(1993) キャンプ経が幼児の幼稚園での自己制御機能に及ぼす影響。日本体育会44大会号:363-368。  
楠本千里、伊藤順子、山崎晃(2003) 幼児・児童の自己制御機能と自己実現との関連